

山椒栽培と神通砂防

Sansyosaibai to jintsuusabou

語り手 竹腰藤年

聞き手 山本真紀

企画:高山市

取材日:令和4年1月18日

山椒栽培

私は、栃尾で生まれて、栃尾小中学校を卒業しました。その後は、高山にある岐阜県職業訓練学校で1年間木工の勉強をして、各務原市の家具屋に就職しました。そして、その後、転職した愛知県江南市の家具屋で2年ほど働き、栃尾に戻ってきたのは、21歳の時です。栃尾には、家具屋がなかったので、建具屋で大工の仕事をした後、平成13年まで、美笠建設で大工・型枠工・技術屋として働きました。

京都にある「七味家本舗」に入ったのは、平成17年です。「七味家本舗」は、昭和20年代からずっと、奥飛騨の干した山椒を仕入れていたんです。うちの親父が、山椒を出荷しながら、山椒組合の役をしていた関係で「七味家本舗」の会長さんや社長さんと付き合いがあり、そのご縁で「七味家本舗」で働くことになりました。当時、「七味家本舗」での私の主な仕事は、奥飛騨で乾燥させた山椒や七味の材料として農家の方に作ってもらっていた鷹の爪を買い上げ、乾燥させ、必要な時に「七味家本舗の本社工場」へ納める事でした。今は、仕事の内容が増えていろんなことをやっていますよ。山椒をただ乾燥させるだけではなく、乾燥の程度だとかいろいろ改良しながら、より品質の良い物を作り出そうとしています。昔は、山椒栽培農家で天日干した山椒を買い取っていましたが、現在は、乾燥する前の緑色の実を買い取って、人工乾燥しています。

奥飛騨の村上に「飛騨山椒」という会社が出来ました。この会社は、山椒を専門で扱っているんですけど、奥飛騨の人から、山椒を直買いもしますし、山椒組合を通した買い取りもします。そういうこともあって、現在、奥飛騨でどれだけの量の山椒が収穫されているのかちょっとわからなくなりました。「飛騨山椒」は、地元の業者ですから、これからも大事にしていきたいと思います。

今は、本郷でも山椒栽培をしています。元々、奥飛騨産の「今見山椒」が元祖です。元は、山に自生している山椒を、畑に植えて、改良し、実を収穫していました。山椒の売り上げが1番良かったのは、平成4年頃です。山椒の生産者も多く、収穫量もかなり多かったんです。実際、金額にして、8000万円くらいの売り上げがありました。農協でも、山椒栽培の奨励をして、「売り上げ1億円を目指して頑張ってください」と言っていたんですが、それから後は、ジリ貧です。山椒栽培を辞めて、旅館業をはじめとした観光業や他の事業に移っていく生産者が増えていきましたね。みんな、だんだん現金主義になっていったんでしょうね。それに加え高齢化が進み、ますます山椒栽培をする人がいなくなっていました。実際に後継者不足で、放置されている栽培地も増えてきました。このように、山椒栽培をする人がかなり少なくなって、本当に困っています。男性も女性も結婚しない人が増えてきて、だんだん若い後継ぎが



竹腰藤年
昭和24年1月1日生

プロフィール

<学歴>

昭和39年3月 栃尾小中学校卒業

昭和40年3月 岐阜県高山職業訓練校卒業

<職歴>

昭和40年4月 各務原市家具製造会社

昭和42年10月 愛知県江南市家具製造会社

昭和45年1月 地元建具会社

昭和49年1月 美笠建設株式会社～平成13年退職

平成17年4月 七味家本舗入社 現在に至る

<役職>

平成11年4月 上宝村村議会議員(市町村合併まで)

平成18年3月 飛騨高山森林組合 理事

平成27年 30年再任 令和2年度解任

平成21年2月 高原山椒生産組合長 2019年2月まで

平成20年4月 特定非営利活動法人神通砂防理事長
現在まで

いなくなっているんですよね。今は、65 歳になって、会社を定年退職した後に山椒栽培をしている人達が頼りです。

苗の不足

今後の課題は、山椒の苗が不足していることです。私も苗作りをしています。より品質の良い山椒を作るために、接ぎ木と挿し木で苗作りをします。しかし、接ぎ木や挿し木で作った苗は、寿命が 20 年から 25 年ほどしかないので、順番に山椒の苗を植え替え続けられないといけません。その為には、苗の供給をすることが本当に大事なことです。種から育てた苗は、40 年くらい持つ木もありますが、種から苗を作るのも簡単ではないんです。なぜなら、山椒の木には、雄と雌があり、雌の木にしか実が付きません。もし、種から苗を育てた場合、実が付く木かどうか分かるまで 4 年以上もかかるんです。だから、始めから実のなる木を使って、接ぎ木や挿し木をして、苗を作るんです。これが確実ですからね。本当に、いろいろ難しいですね。

私は、1 年中、温泉熱を利用したビニールハウスで苗を育てていますが、昨年の秋、そこの苗にたくさんのアゲハ蝶の幼虫が付きました。1 センチくらいの幼虫は、茶色くてわかりにくくて、駆除しにくいんです。もしかしたら、地球温暖化の影響なんでしょうか、ここ 4 ～ 5 年前から急にアゲハ蝶の幼虫が増えてきましたね。アゲハ蝶の幼虫は、6 ～ 7 月の苗の出たばかりのやわらかい葉っぱを全部食ってしまいます。また、山椒は、あまり害獣による被害はないのですが、これまた、温暖化の関係なのか、以前、この地区にいなかった鹿も増えてきました。鹿は、木の皮を食べて木を枯らしてしまうので注意が必要です。

山椒は、非常に気候に左右されやすい植物です。山椒の実が付き始めたばかりの頃に霜が降りると、実が霜で焼けてしまって駄目になるんです。近年、温暖化の影響なのか早く暖かくなることが多くなりました。そうすると早い時期に実が付くんですが、そこでまた、寒くなって遅霜にあたることになり、実が駄目になってしまいます。専門家に霜被害の対策を相談しましたが、今のところ、これといった良い方法が見つかっていません。まあ、それこそ、朝、火を焚いて温めたりするしかないですね。桃などの栽培と同じです。ひと昔前は、タイヤを燃やして温めていたんです。そうすると、ある程度の高さのところに黒い煙が漂い、その黒い煙がうまく作用して地温の熱を逃がさず、山椒栽培には都合が良かったんです。でも、今は、環境の面からも、タイヤを燃やして温めるわけにはいなくなりました。実際、20 年以上前からタイヤを燃やしていません。やっぱり、山椒栽培にとって、霜への対策と安定した継続的な苗の供給はとても大切なんです。

山椒栽培に適しているのは、扇状地で、水はけがよくて、ある程度、水もないと駄目なんです。土壌が非常に大事なんです。田んぼをやめた土地に山椒を植えても、なかなか良い物ができないんです。幸い、山椒は、病気にはわりと強いんです。ただ、膏薬病^{こうやく}の駆除は必要ですね。その対



山椒につく害虫



策として、3月頃に山椒の木の消毒をしなくてはならないんですが、生産者が高齢になった為に消毒することが難しくなりました。特に小規模で栽培しているところは、高齢の女性がひとりで山椒を作っていることが多く、なかなか消毒が難しい。これも課題のひとつですね。

山椒の挿し木や接ぎ木をした苗から収穫できるまでに4～5年かかるんです。そうなると、やっぱり、計画的に順番に苗を植えて続けていかなくてはなりません。私ももう73歳です。それをどうやって伝えていくかですね。今は、山椒組合に若い人も入っていますね。まあ、若いっていつでも50代なんですけど、とにかく、その人達にいろんなことを引き継いでもらえるようにしたいですね。そして、可能なら、山椒の苗木をもっと安く供給できるようにしたいね。今は、苗木購入に対して、山椒組合が、半分ほど補助しています。ただ、苗を作っている立場からすると、もっと高く買い取ってもらいたい気持ちもあります。そのあたりの兼ね合いは難しいですよ、本当に。実は、霜の被害で、ものすごく山椒の生産量が減ったことがあるんです。そういう時は、高山市や農協をお願いをして、助成してもらったこともありますよ。あまりにも生産が落ちた場合、山椒組合では、そういう働きかけもしています。



山椒の木

後継者不足

山椒は、実だけではなく、葉も商品になりますが、葉は春しか採れません。本当は、春の時期だけでも、山椒の葉を出荷できれば良いのでしょうけど、なかなか。流通に乗せることは簡単ではありませんね。山椒の葉だけを専門に出荷している人達もいますし、そのあたりも難しいですよ。また、成熟する前の未熟な実は、乾燥して、ちりめん山椒等に入れます。この未成熟な山椒の実は、6月頃の4～5日の限られた間しか収穫できません。山椒の花は、花だけで煮て、料理に添えますが、これも開花する2～3日しか収穫できないんです。いろいろと簡単ではないですね。大阪の堺市に本社がある「やまつ辻田」という会社があります。その会社が、蔵柱に山椒を乾燥させる工場を作りました。今、ちょっと、山椒の奪い合いみたいな感じになってますね。奥飛騨山椒組合からしたら脅威ではないでしょうか。現在、山椒だけではなく、香辛料全体が需要に対しての供給量が足りずに非常に困っていますから、今後、また、いろんなところから山椒の買い付けに来る可能性もあります。やっぱり、今、香辛料は、注目されていますからね。

私達もいろんなアピールをして山椒を作ってもらうように工夫しているんですけど、なかなか、ね。夏の一時期の小遣い稼ぎ程度でもいいので、副業として山椒栽培にちょっとでも関わる人が増えるといいなと思います。わが家もずっと昔から山椒を作っています。もちろん、副業です。山椒を主業にした農家は、奥飛騨でも1軒か2軒あるかないかじゃないかな。ほとんどの方が、副業で作っていますよ。それに、山椒の手入れはそれ程かからないんです。1年間のうち、畑の草刈りを2回か3回と消毒が1回程度、可能なら剪定を2年に1回くらいですね。山椒の樹高は、

だいたい3メートルくらいかな。それ以上高いと、収穫しにくくなるので、剪定をして高くないようにしていますね。

せっかくの奥飛騨の山椒を無くさないようにしたいですね。実は、私自身も残念ながら、山椒栽培の後継者がいないんです。子ども達は、高山に出て、家族形成をしているんです。まあ、将来的には、家があるので、こちらに戻ってくることもあるかもしれませんけど。

NPO神通砂防設立の歴史

私は、平成の市町村大合併の前の6年間、上宝村の村会議員をやりました。最初に議員になったのは、50歳の時でした。実は、この合併の時、高山市は、北飛山岳救助隊のことをなかなか認めてくれなかったんですよ。どちらかと言うと、認めてもらえないというよりは、協力してもらえなかったという感じでしょうか。それと同じように、NPO 神通砂防のことも簡単に認めてもらえませんでした。高山市には、もともと砂防がないですからね。きっとイメージできなかったのではないかと思います。

上宝村では、市町村合併と同時に奥飛騨の砂防が衰退してしまうんじゃないかと随分、危惧しましたね。それまで、上宝村で一生懸命にやっていた砂防に関する国への要望などがどうなるのか心配でした。元々、高山市には、砂防がないので、要望やいろんなことが疎かになってしまうのではないかという不安もあって NPO を設立しようと決心して、設立に至りました。

国が、高原地域に直轄で砂防事業をはじめてから100年程経っています。はじめは、神岡町で国の事業が始まり、それが続いて、今に至るわけです。特に奥飛騨では、多くの砂防事業をやっています。近年の神通砂防の事業費は、年間20億円くらいです。これは、地域に国庫が20億円ほど入ってくるということですね。私達は、それを切らさない為にいろいろな活動をしてきました。

昔から、栃尾では、大水が出ると川が暴れました。そのことを先人が懸念して、栃尾で砂防をどうにかできないかということになり、まずは、上宝村に陳情しました。しかし、当時の上宝村でもすぐにどうこう対応できないという答えが返って来ました。そこで、直接、新潟にある北陸地方建設局に陳情しました。その陳情を10年くらい続けたおかげで、「たから流路工」の事業が始まることになったんです。その時の北陸地方建設局の河川部長が、学生時代に神通川水系砂防事務所の栃尾出張所にアルバイトに来ていた縁もあって親しくなりました。そのうち、栃尾だけではなく、上宝村も砂防事業に対して協力しだしたんです。次第に、上宝村自体が砂防事業に力を入れることになりました。当時の上宝村長が今井嗣延という方だったんです。その嗣延さんが熱心に、国土交通省の砂防部に要望を出してくれたりしていたんですね。それを称えて「しのぶ砂防堰堤」と名付けた堰堤もあります。「しのぶ砂防堰堤」は、本体がトンネルになっており対岸へ抜けることができます。また、中から外が



砂防塾での説明

見えるようになっていきますし、冬期は、地元の方がライトアップやイルミネーションでハートを作り、まるで聖地みたいにしていますね。

過去に何度か災害があっても、人的な被害はほとんどありません。これも神通砂防のおかげですね。昭和 54 年 8 月 22 日に栃尾の洞谷というところで土石流が発生して、観光客 3 人が亡くなっています。その時は、かなりの集中豪雨でした。全国でも栃尾が 1 番ひどい被害でした。地元の人達は、洞谷は、結構、荒れるということを知っていたので、すぐに逃げて、避難体制を作っていたんですが、悲しいことに、観光客の乗った車が流されました。車には、3 人の観光客が乗っていました。残念ながら、2 人は遺体で見つかりましたが、残りのひとは、いまだに発見されていません。全国で栃尾だけが大きな被害に遭いましたから、大々的にテレビなどで報道されました。災害復興支援もすごかったです。私は地元の消防団に入っていたので、土砂出しとか、水ひきをしました。だいたい 1 週間くらいで落ち着きました。この時も国が、40 ～ 50 億円かけて災害復旧をしましたね。地元で建設業が結構あったんで、重機を使って復旧工事を行いましたよ。その時は、3 年くらいで復旧できました。

今は、国がいろんな施設を作るのに、ただ施設を作るだけではなく、その後に何か活用できることを求めてきます。費用対効果だけではなく、他にも観光などで使えないかとか、地元で貢献できるかなどを考えるんですね。「たから流路工」の入り口には、蛍水路を作り、元々、蛍のいないところで、蛍が飛んでいます。また、他の施設も、整備をしてグラウンドゴルフ場など有効に活用していますね。

やっぱり、人的被害があったこと、もともと災害に対して脆弱な土地であること、すぐそこに 3000 メートル級の山があることなどが影響して、防災の意識は非常に高くなります。もし、焼岳が噴火して火砕流が流れた場合は、栃尾まで流れて来るという被害想定なんです。そうなるどこへ逃げるかということ、裏山へ逃げるしかないですね。もし焼岳が噴火して火砕流が流れたら、予想では、雲仙普賢岳のようになるらしいです。火砕流は時速 100 キロ以上で流れるそうなので、急いで下流へ逃げていくしかないですね。

「地獄平砂防堰堤」は、ものすごく大きいダムで、縦方向に大きな穴が空いています。ここから、天気の良い日は槍ヶ岳が見えるんですね。天端は歩けるようになっています。万が一、焼岳が噴火した場合、火砕流を一時的にここで止めることができます。ほんの何分間かですけど、多少は逃げる時間を稼ぐことができます。このように実用的な堰堤がいくつもあります。また、複数のライブカメラを設置していて、リアルタイムに焼岳などの監視もしていますね。

昔は、大水が出ると水と一緒に大きな石が流れて川の線が変わりました。そういう時の水は、高い方高い方へと流れましたが、今は、ほとんどそういうことはなくなりました。でも、令和 2 年、3 年の大水では大きな石も流れて来ました。国土交通省の神通砂防は、100 年に 1 度の雨という想定で砂防ダムなどの計画をしているそうですが、近年はいつそ

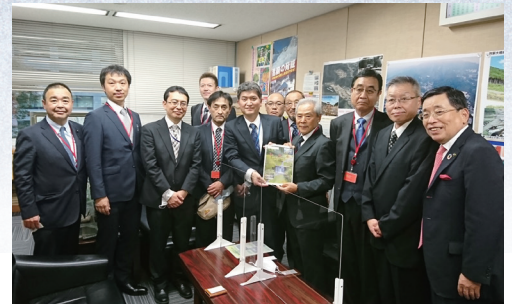


砂防ツアー



れ以上の雨が降り、災害が起きるかがわからない時代になってきました。

旧高山市は、平成の大合併以前は、あまり災害が起きていなかったからなのか、災害に対してわりと鈍感でした。砂防といってもピンとこない、砂防とはなんぞやみたい感じでした。それに対して、当時の上宝村は、それは仕方がない。合併して、徐々にそういうことをアピールしていこうと思って NPO を立ち上げたわけです。当時の村議会の中でも NPO 設立の話が出ました。そこで、国土交通省の方などに教えてもらいながら NPO を作りましたね。発足したのは、平成の大合併の半年くらい前だったと思います。最初の理事長は、奥飛騨温泉郷観光協会長を長い間やっていた野尻辰彦さんでした。この方も村会議員の OB です。合併してからは、前上宝村長の小池さんが理事長を務めました。私も設立当初から、理事を務め、その後、理事長に就任し、今に至っています。現在、私を含めて 12 名の理事がおります。この 12 名で、1 年に 1 回、東京にある国土交通省砂防部へ要望に行きます。私は、それとは別に全国の砂防の会議にも出席します。年に 2 回ほどかな。この会議などで、砂防関係の OB や担当の方と仲良くなります。このような人と人とのつながりが、将来のいろんなことの可能性に繋がります。今までも、そういう人と人との付き合いを大事にしながらやっています。今は、高山市も砂防にとっても理解があり、協力的です。高山市としても、頻繁に要望を行ってもらっています。



砂防部長要望

砂防の重要性

砂防に関することは、本当に、伝えていって欲しいですね。今、奥飛騨に建設業者が何社もあり、とてもありがたいことに、その会社に結構、若い人が勤めてみえます。今後は、そういう人にボランティアとかいろいろ形で活動に参加してもらえると良いですね。NPO を設立した当初は、上宝村の全戸が会員になっていましたが、市町村合併をしてしばらくしてから、半分くらいに減りました。それから、また少しずつ増えて、現在は、全体の 3 分の 2 くらいが会員だと思います。もっと会員を増やしたいなと思っています。上宝地区の方は、どちらかというとあまり、興味のない方がいらっしゃいますね。どうしても、災害の危険が少ない地域の方は、あまり理解がない気がしますね。非常に残念ですね。もっと、いろんな人が理解してくれるといいなと思いますよ。実際には、建設業に勤めている人が結構な人数いますからね。建設業自体が、砂防事業に関わっているところがほとんどです。そういう意味でも、もっと、砂防に対する理解が広がっていくと良いですね。子ども達に防災の教育をしているのは、将来的にそういう意識が高まれば良いなという気持ちでやっています。学校の登山体験なんかも、山から川を見ると、地形なんかもよくわかりますからね。焼岳への学校登山などのサポートも一生懸命しています。毎年、北稜中学校、本郷小学校と栃尾小学校に筑波から「ナダレンジャー」をお招きして雪崩れのことを楽しく学んでいます。

本当に、砂防なくして、今の奥飛騨は考えられません。地域の安全も



ナダレンジャー

そうですが、経済的にも非常に大切なことです。やっぱり、多額の国庫が上宝地区に入ってくるメリットは、大きいですよ。奥飛騨は、観光と砂防が要です。それに対して、本郷は、農業が主ですね。昔から、本郷とか蔵柱は、米どころで裕福な家が多かったですよ。たまたま私の家はずっと米は作っていましたが、奥飛騨で、米はあまり採れませんでした。特に平湯の方は、稗や粟が多かったです。平湯が、観光で生計をたてられるようになったのは、そう昔のことではありません。元々は、湯治で少しばかりのお客が来た程度でしたからね。安房トンネルが出来て、すぐお客が増えるという想定をしていたんですけども、そうではなかった。あと、バブルの時代に投資をしすぎた影響もありますね。温泉ブームの頃、奥飛騨は、かなり観光に投資しました。しかし、残念なことに温泉ブームは一時的なブームで終わってしまいやりくりが出来なくなりました。そこに来て、コロナの影響ですからね。ダメージは大きいです。砂防事業は、防災の面だけではなく、経済活動も動かしています。現在、奥飛騨に建設業が3社あります。以前は、6社ありました。それくらい繁栄していたんですが、だんだん事業費が減り、会社をたたむところが出てきました。砂防は、地元に貢献していますよ。当然、会社があれば、従業員さんもいます。働く場所があるので、若者も戻ってきます。また、防災の観点から見ると、このような建設会社があるおかげで災害復興も早いです。栃尾の先人が、ねばり強く要望を出したおかげですね。私は、たまたま建設業に入り、そういう事業に関わったこともあるので、経験上いろいろわかるじゃないですか。行政のこともわかるし、そういう面では、砂防に関わって本当に良かったと思います。

